



幕末・明治の薩摩の人物



西郷隆盛

(1827年~1877年)

徳川幕府の時代から明治維新へ。その大変革の中心的な役割を果たしたのが西郷隆盛です。1854年、下級武士ながら島津斉彬に抜擢されます。斉彬の下で活躍する中で、江戸や京で人脉も広げました。しかし、1858年の斉彬の急死後は奄美大島潜居、徳之島・沖永良部島への遠島と苦難が続きました。その間に幕府の権威が大きく揺らぎ、幕政改革に向けて薩摩藩の動きも活発になります。そんな情勢もあって、1864年に西郷は藩に復帰し、大久保利通や小松帯刀とともに藩を動かしていきます。そして、薩摩藩は倒幕へと方針を変えます。薩摩藩が中心となって幕府を政治的に追い込み、戊辰戦争へと持ち込み、西郷は軍の司令官として活躍しました。明治政府では政治の中枢を担うも、1873年に鹿児島に戻ります。そこには急激な変化に不満を持つ士族たちの姿がありました。1877年、西南戦争が勃発。士族の思いを背負って城山に散りました。



島津斉彬

(1809年~1858年)

第11代薩摩藩主。曾祖父の島津重豪の薫陶を受けて西洋事情に明るく、アジアに勢力を広げる西洋諸国の動きに対して大きな危機感を抱いていました。1851年に藩主になると、近代化事業を推進して富国強兵・殖産興業を目指しました。ペリー来航で世の中が騒がしくなり、幕府からも頼りにされます。開国問題や将軍継嗣問題など、幕府の政治にも大きく関わりました。



大久保利通

(1830年~1878年)

西郷隆盛と同じ郷中に育ちます。1861年に島津久光に登用され、薩摩藩を動かします。1867年には岩倉具視らとともに王政復古のクーデターを成功させて新政府を樹立。明治政府では新たな体制作りを進め、廃藩置県などの改革を行いました。さらに、1873年には内務卿(実質的な首相)にも就任しています。西南戦争の翌年、新政府に不満を持つ士族に襲われて命を落としました。



島津久光

(1817年~1887年)

第12代藩主・島津忠義の父。若い藩主の後見として藩の実権を握り、兄である斉彬の遺志を継いで幕政改革を試みます。薩英戦争を経験して外国の実力を知り、集成館事業を再開したほか、イギリスへの留学生派遣も実行しました。



小松帯刀

(1835年~1870年)

若くして薩摩藩の家老となり、軍事・教育・財政・外交など藩の様々な分野に手腕を振るいました。明治維新前後の難しい局面においても藩政を主導します。西郷や大久保が活躍できたのも、この人がいたからこそだったのです。



桂久武

(1830年~1877年)

幕末の若き家老の一人。小松とともに薩摩藩の藩政を担いました。日置島津家の出身で、同家に出入りしていた西郷隆盛とは若い頃から親交がありました。のちに西南戦争に参加して薩軍の補給部門を担当。城山で戦死しました。



大山綱良

(1825年~1877年)

西郷隆盛と同じく加治屋町出身。剣(薬丸自顕流)の達人として知られ、有馬新七らが粛清された寺田屋事件では鎮撫使として派遣されました。1871年に鹿児島県令(知事にあたる)に就任。西郷隆盛による私学校に協力し、西南戦争でも西郷軍を支援しました。



西郷従道

(1843年~1902年)

西郷隆盛の弟。戊辰戦争に従軍し、明治時代になると軍人・政治家として活躍。鹿児島に戻る兄にはついていかず、政府に留まりました。のちに初代海軍大臣も務め、従道が整備した海軍は日清戦争・日露戦争で活躍することになります。



五代友厚

(1835年~1886年)

薩英戦争ののちにイギリスへの留学生派遣を藩に進言。採用されて、五代も渡欧しました。ヨーロッパでは紡績機械の買い付けなども担当。明治政府の役人を辞めて、大阪経済の復興に尽力しました。